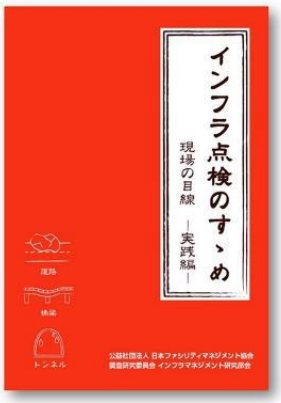
▼オピニオン：インフラテクコンから広がる社会

インフラテクコンと人材育成

公益社団法人日本ファシリティマネジメント協会
インフラマネジメント研究部会員
株式会社ガイアート道路維持戦略室長
幸野　茂

はじめに



私は、公益社団法人日本ファシリティマネジメント協会のインフラマネジメント研究部会に、研究部会創設以来在籍し、自身の維持工事の経験や、自社におけるインフラマネジメントに関する取組を紹介しながら、インフラマネージャー育成やその育成の必要性について調査・議論し、様々なチャンネルを使って社会に訴える活動のお手伝いをしてまいりました。その代表的な活動として、インフラメンテナンスに携わるまたは、これから始めようとする若手職員、技術者向けの教本とするべく発刊いたしました、「インフラ点検のすゝめ」の共同執筆などに加わってきました。

その延長線上進化形として、今回のインフラテクコンの企画運営へと繋がっていきました。インフラテクコンの企画を具体化・実現していく課程で、その他の実行委員会や学生さんの熱量に圧倒され、くっついていくのがやっとでしたが、そんな中で、協賛企業としての立場でなんとか大会の運営をサポートすることができたのかなという気がしています。

インフラテクコンを企画・サポートしていくなかで、与えられたテーマに対して、学生たちがゲーム感覚で課題解決しようとする過程を垣間見ることができ、インフラマネジメント研究部会のテーマのひとつである「インフラマネージャー育成」の重要性とその難しさをあらためて認識しました。

今回のインフラテクコン 2020 が、産官学それぞれに向けて提起したこと・できたことがあるのではないかと思い、考察してみました。

産としての取組と役割

ひと頃、3K という言葉が流行し、建設業界はその最たるものでした。あれから職場環境は徐々に改善されてきましたが、いまだに大手ゼネコンにあっても深刻な人材不足に悩んでいる実態があって、私が属する道路建設業界などでは、さらに輪をかけて人気のない業界なので、人材獲得のためにあの手この手で就活生獲得に苦労しているところです。

特集 道路管理24時 ―暮らしを支える仕事―

道路ユーザーと沿線の安全・安心をまもる

道路維持管理の技術とプライドを継承していくために

幸野　茂

24時間365日眠らない道路は、国や都道府県、市町村の道路管理者にもちろんのこと、様々な業種のプロフェッショナルたちによって維持されている。番犬は、パトロールや清掃作業などの地道な維持作業を行いながら、時には交通事故の現場に駆け付けて、破損ガードレールの応急手当てと後片付け、時には転倒した標識の片付け、時には歩道橋の高かさ、時には車線4以上の長い地震の発生直後や暴風雨の中をパトロールするなど、路上で安心して通行に支障となる全ての事象に緊急に対応しなければならない。道路ユーザーを人知れず安全・安心に導く、縁の下の力持ちだ。

1．道路維持業者の使命

そのような状況のなかで、社内でもさらに人材不足が深刻なのはメンテナンス分野です。代表的なメンテナンス業務が直轄国道維持工事で、24 時間 365 日精神的に（実質的にも）拘束されることから、人気がなく人材確保が困難になっています。公益社団法人日本道路協会の雑誌「道路」の 2018 年 6 月号特集企画「道路管理 24 時～暮らしを支える仕事～」に、自らの直轄国道維持工事に携わった経験から、24 時間 365 日の苦労をしながら、いかに自らのモチベーションを維持してきたかを寄稿したことがあります。私は古い人間なので、エンジニアとしての使命感や作る喜びからモチベーションを維持してきた面が多い

にありますが、これからの SDGs を基本とした CSV の時代においては、社員のサステイナブルな「エンゲージメント」や「モチベーション」の向上策が重要な鍵になると考えています。

弊社では、維持工事等に従事する社員の処遇改善のために、職務手当を支給する制度を導入し、業務改善のフォローを道路維持戦略室で行う等の取組を行っています。対外的には有料道路「白糸ハイランドウェイ」をマネジメントしていることをアピールし、ある意味メンテナンス従事者の地位向上を目指しています。ただし、いかなる現場でも管理責任があるという点では、維持工事も一般の工事もその責任の重大性や辛さには変わりないので、公平性から維持工事に偏った施策には限界がありますが･･･。

産側には、技術革新のみに注力せず、魅力ある業界づくりに果たしていく役割があると思います。

官としての役割

当社は、全国各地で直轄国道維持工事を担当していています。24 時間 365 日の過酷さや、生産性の悪さから社員に人気がなく、社内的に立場が良くない時代もありましたが、積算基準の見直しなどの効果で、ここ数年収支が改善してきています。当然ながら、儲かったことは一番の成功体験にもつながり、担当者のモチベーションの向上にも寄与しています。

府中市や三条市に代表される包括維持管理の流れは、PBMC を基盤とする企業の裁量をインセンティブとすることで、企業側および担当者のモチベーション維持や受注意欲の向上に繋がると考えます。

建設業界は、特に有事においては一番のエッセンシャルワーカーでありながら、日常を影ながら支えていることはあまり知られていません。山崎エリナ氏が写真家の目線から、建設業が当たり前の日常を影ながら支えている様子を切り取り紹介してくれていますが、官側にはインフラメンテナンス従事者の地位向上につながるような施策を期待します。

学としての役割

例えばスポーツの分野でも、オリンピックなどで国際的に戦うためのアスリート強化には、競技人口を増やし、裾野を拡げることが重要です。裾野を拡げるためには、次世代を担う若者たちが「興味」や「関心」および「競争心」を抱き、「わくわく感」や「インセンティブ」を感じられることが鍵だと、今回のインフラテクコンを通じて感じたところです。画一化を是とする今の教育現場にあっては、一番欠けている部分かもしれませんが、大学や高専等の高等教育現場においては、実現可能な領域だと思います。

同様のことが、現在の土木工学の教育現場でもあるように思われます。まず第一に、未だにインフラメンテナンス工学という学問が存在しないということ、インフラテクコンのテーマに対してインフラの課題を学生たちが十分には認識していなかったことです。

個人的主観ですが、インフラメンテナンスとは、インフラ経営から点検技術、補修技術、各種工学分野（ここがやっかい）、日常点検・補修作業、現場マネジメントを総合して横串を指すことだと考えています。生意気なことをいうようですが、縦割りの弊害がこういう部分にも現れているのかもしれません。

インフラテクコンをふり返って

高専の志望動機に、「ロボコンに出たいから高専に入った」というものもあるそうです。今回、当社がテクコンに協賛した動機のひとつも、優秀な人材が欲しいからですが、動機付けはどうあれ、人材を安定的に確保しサステイナブルなメンテナンスを実現するための、重要なサイクルのひとつの好事例になったと、確信しております。今年のインフラメンテナンス大賞の、有力候補ではないでしょうか。

まとまらない稚拙な文章でたいへん申し訳ありませんでした。現場のことしか知らない人間の戯言と、一笑に付してください。